全国水平社の創立と山田孝野次郎少年の訴え

1　全国水平社の創立

江戸幕府は、豊臣秀吉のときに行われた武士と百姓・町人を区別する（兵農分離）をさらに進めていきました。この過程で百姓や町人に組み入れられなかった一部の人々は差別されることになりました。差別された人々は、仕事や住む場所、身なりを百姓や町人と区別され、村や町の祭りへの参加をこばまれるなど、厳しい差別のもとにおかれ、幕府や藩も差別を強めました。

これらの人々は、こうした差別の中でも、農業や皮革の製造、手工業などを営み、芸能で人々を楽しませ、また、警察の仕事をになって、社会を支えました。

明治時代になると、江戸時代までの身分制度が改められ、すべての国民は平等であるとされ、職業や住む場所が自由に選べるようになりました。また、1871年の法令（いわゆる「解放令」）によって、差別に苦しめられてきた人々も、身分上は解放されました。しかし、明治政府は、差別された人々の生活を改善するための具体的な政策を行いませんでした。そのため、長く続いた差別意識は簡単に改まらず、差別されてきた人々は、望む仕事につくことや教育を受けることがむずかしく、苦しい生活の中で結婚や就職、住む場所など、日常生活でのさまざまな差別が新しい形で残されました。

こうした状況に対して、差別されてきた人々は、ひるまず、国民としての平等を求め、自らの力で差別をなくす運動を進めて行きました。しかし、社会全体を動かすまでにはなりませんでした。

1918（大正７）年７月、一部の商人が米を買い占めたため、米の値段が急に値上がりしました。そのため、多くの庶民は米が買えなくなり、米屋を打ちこわし、米を持ち出すという行動をおこしました。

この騒動の原因は、日本軍がシベリアに出兵するということで、米が不足することを見込んだ米屋が米の値上がりを期待して買い占めたことにはじまります。わずか数ヶ月の間に米の値段が２倍以上にあがり、人々の生活は困窮することになりました。

このようななか、富山県で起こった「米よこせ」の騒動は瞬く間に全国に広がりました。米騒動は「自らの行動こそ大切だ」という教訓を残しました。この事件がきっかけになり、あらゆる苦しい生活をしている人々がいっせいに「自らの行動」を起こしました。労働者の生活を守るための労働運動や、小作料の引き下げを求める農民運動が起こりました。また、女性の地位の向上をめざす運動も進められました。

差別され、苦しめられてきた人々も、政府に頼るだけでは差別問題は解決しないとして、1922年に西光万吉らを中心に全国水平社を結成して平等な社会の実現をめざし、みずからの力で差別をなくそうと立ち上がりました。

1922年（大正11年）３月３日、全国から多くの人々が、汽車で、自転車で、あるいは野宿をしながら歩いて、京都市岡崎公会堂に集まりました。広い会場がぎっしりとつまり、いよいよ大会が始まりました。最初に、この大会が生まれるまでの苦労が報告され、水平社宣言が読み上げられました。

2　水平社宣言

全国各地の差別を受けているなかまたちよ、集まって力を合わせよう。

これまでの約50年の間に、いろいろな方法と、多くの人たちによって行われてきた、私たちのための取組は、何の効果もありませんでした。

むしろ、人間に対して、かわいそうだと思ったり、ほどこしたりする同情のような取組は、かえって多くのなかまから差別を見ぬき、差別とたたかう力を失わせていきました。

このことを考えれば、人間を尊敬し、差別をなくそうとする運動を、私たち自身が起こすことは当然のことです。

私たちの祖先は、自由と平等を心の底から願い、それを実現しようと取り組んできました。身分のしくみに苦しみ、差別を受けながらも、たくましく生きてきました。どんなに苦しい時でも、私たちの祖先は人間としての誇りを失うことなく生きぬいてきました。

そうです。私たちは、この祖先の誇りある生き方を受けついで、今、差別のない社会を築いていこうとする時代に生きているのです。私たちの力で差別をなくす時代が来たのです。

私たちが、その生き方を誇りとする時が来たのです。私たちは、どのようなことがあっても、決して、自分を見下げたり、周りの目を気にするような行動で、祖先の誇りをけがしたり、自分という人間を傷つけるようなことをしてはなりません。

私たちは、人の世の冷たさがどんなに冷たいものか、人間をいたわるということが本当はどういうことかをよく知っています。

だからこそ、私たちは心の底から人間の世の中のぬくもりと、新しい時代への希望を求めているのです。

水平社は、このような思いから生まれました。

人の世に熱あれ、人間に光あれ

大正11年３月

全国水平社創立大会

3　山田孝野次郎少年の訴え

何度も涙に言葉をつまらせながら、ふるえる体を必死に抑えてて宣言が読み上げられたとき、会場からは割れんばかりの拍手がわき起こりました。

このあと、各地の代表者による演説が始まりました。その中に、まだ 16才だった山田孝野次郎少年がいました。彼は壇上に立つと、せきを切ったように自分が受けてきた差別について語り始めました。

「私は、学校で同級生や教師から差別され、身も心も冷え切るような思いで過ごしてきました。校門をくぐったら最後、勉強どころか涙で一日が終わる日が何回もありました。私は役所の役人や先生の演説や話を聞きました。それらの人々は口をそろえて人間の平等が必要だとさけびます。人と人との差別は間違っていると言われます。そして、いかにもそのことを理解しているように、差別感情などこれっぽっちもないかのように言われますが、いったん教壇に立った先生のひとみは、なんと冷たいものでしょう。

しかし、それでわが身が悲しいかというと、決して悲しくはありません。私には、世間からさげすまされなければならない理由が、何一つとしてないからです。

尊い人というのは、生まれながらにして、何か、他の人と違う印がついているのでしょうか。まさかそんなことはありません。尊い人もいやしい人も存在しないのです。私の体の中には、ほかのすべての人たちと同じように、赤くて熱い血液が流れているのです。」

山田少年は、続いて学校で受けた差別の話をしました。話している間に、悲しみがあふれ、言葉につまり、壇上で泣いてしまいました。聞いていた人々にとっても、山田少年の話は自分自身のことでした。会場は、涙と声をころしたすすり泣きがあふれました。だが、このときです。山田少年は、きりっと顔を上げ、大声で呼びかけました。

「今、私たちは泣いている時ではありません。大人も子どももいっせいに立って、この差別を打ち破りましょう。光り輝く世の中にしていきましょう。」

会場は、たちまちはげしい拍手でうめつくされました。水平社の創立は、人間が人間としての誇りを取り戻すたたかいの始まりだったのです。水平社が生まれた知らせは全国に広がり、自ら差別をなくすために立ち上がった人々により、各地に水平社が結成され、差別とのたたかいが本格的に始まりました。

全国水平社機関誌「水平」第１巻 1922 をもとに作成

小学校６年　道徳
全国水平社の創立と山田孝野次郎少年の訴え

１ねらい

〈知的理解に関して〉

全国水平社が創立された社会背景や時代背景をつかむとともに、差別されてきた立場の人たち自らが立ち上がり、差別からの解放を求めることの正当性を理解する。

〈人権感覚に関して〉

山田少年が訴えたかったことの中身、人を分け隔てることの不合理さに対する様々な考えを出し合う活動を通して捉え、みんなで立ち上がって差別をなくそうとする態度を育成する。

２主題設定の理由

教材観

差別のない社会を実現するためには、その社会を構成する人々が真実を見極める社会的な認識能力を高めることが大切である。しかし、差別のない社会の実現を妨げるものに人々の差別と偏見があり、特に、部落差別において顕著である。部落差別の解消のためには、誤った情報や認識に陥ることなく、正しい知識を身に付けるとともに、特定の人々が「分け隔てられる」ことの不当性を関知して、それを許せないとするような、価値志向的な感覚を高めることが重要となる。

資料観

1871(明治 4)年の布告(いわゆる「解放令」)によって、江戸時代に差別された人々の呼び名は廃止され、身分・職業とも平民と同じとされた。これにより古い身分制度はなくなったが、新政府は、差別されていた人々の生活を改善したり、差別をなくすための具体的な政策をとらなかった。そのため、長く続いた慣習や差別意識は簡単には改まらず、結婚・就職・住居などに関する差別は根強く残った。こうした状況を大きく変えたのが 1918 年の米騒動である。差別された人々が米騒動に多数参加したため、政府は生活改善の対策をとる必要があると考えた。しかし、差別された人々は、政府に頼るだけでは差別は解決しないと考え、1922 年に全国水平社を結成し、平等な世の中の実現を目指し、自らの力で差別をなくそうと立ち上がった。

山田少年の演説や水平社宣言の内容から、平等な世の中の実現をめざし、強い意志で立ち上がったことがわかる。授業においては、このように、自ら立ち上がった人々の願いや思いに共感させ、差別をなくすことの大切さに対する様々な考えを深めさせたい。

指導観

この教材は、これまでの部落差別問題学習と歴史の学習に関連が深い内容を含んでいる。学級担任や社会科担当者等との充分な連携を図り、知的理解に関する内容と人権感覚に関する内容を関連させた上で、授業を行うようにしたい。

更には、今だに部落差別がなくなっていない現状とつなげて考えさせることが必要である。水平社宣言の内容は、けっして過去の事というだけでなく、今ある差別をなくすためにも大切にしていくことが重要であることについても考えを深めさせたい。

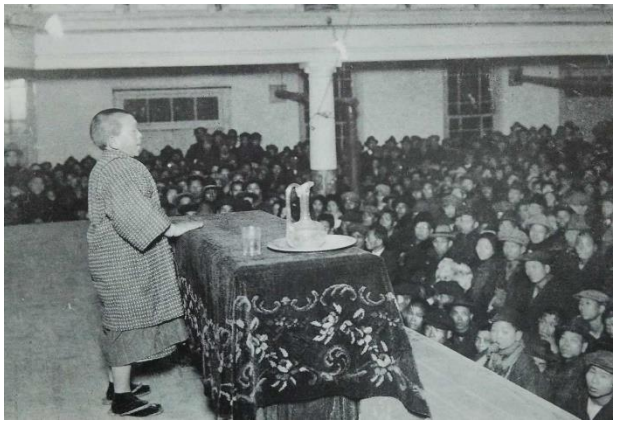
学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	教師の支援
1　資料「全国水平社の創立」を読む。		
2　1871年の法令が、出されても差別がなくならなかった理由について考える。	○　1871年の法令が出されても、なぜ、日常生活でのさまざまな差別が新しい形で残されたのでしょうか。 ・明治政府は、差別された人々の生活を改善するための具体的な政策を行わなかった。 ・人々の差別意識は簡単に改まらなかった。	・差別を受けてきた人々が、望む仕事につくことや教育を受けることがむずかしかったことから差別が解消されずに続いていたことに気付く。
3　全国水平社創立までの様子を話し合う。	○　差別されてきた人々は、厳しい差別のなかで、どのような思いで立ち上がっていったのでしょうか。 ・米騒動や労働運動などを通じて、差別撤廃のためには、自ら団結して行動しなければならない。 ・政府に頼るだけでは差別問題は解決しない。	・米騒動や労働運動などを通じて、差別されてきた人々が、自ら団結して行動すべきことを学んだことに気付く。
4　「水平社宣言」を読み、差別をされてきた人々の思いや願いについて考える。	**○　印象に残ったところや好きな言葉を書いてみましょう。** ・私たちは心の底から人間の世の中のぬくもりと、新しい時代への希望を求めているのです。 ・全国各地の差別を受けているなかまたちよ、集まって力を合わせよう。 ・祖先の誇りをけがしたり、自分という人間を傷つけるようなことをしてはなりません。 ・人間を尊敬し、差別をなくそうとする運動を、私たち自身が起こすことは当然のことです。 ・人の世に熱あれ、人間に光あれ	・当時の差別されてきた人々の思いや願いに共感したところををワークシートに書く。 **・差別され続けても、自分たちは自由・平等を求め続けたこと、あわれみや同情で差別はなくならないこと、人間を尊敬することで差別をなくそうとしたことをていねいに押さえておく。**

学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	教師の支援
1　「水平社宣言」に込められた願いや思いを発表する。		・前時に書いたワークシートを発表させ、水平社創立の意義を思い起こす。
2　資料「山田孝野次郎少年の訴え」を読む。		・写真を用いて、山田孝野次郎少年について、簡単に紹介する。
3　水平社創立大会演説での山田少年の心情を考える。	○　山田少年が、「学校で受けた差別の話をした。話している間に、悲しみがあふれ、言葉につまり、壇上で泣いてしまう。」とは、どんな気持ちで話しているのでしょう。 ・学校で同級生や先生から差別されたくやしさから悲しみがあふれてしまう。 ・勉強どころか涙で一日が終わる日を思い出して涙が出てくる。	・山田少年の気持ちになって、差別に対する悲しみやくやしさに共感する。
	○　でも、山田少年は、「わが身が悲しいかというと、決して悲しくはありません。」と言っています。それは、どうしてだと思いますか。 ・世間からさげすまされなければならない理由が、何一つないから。 ・悲しみを打ち破らなければならないから。 ・悲しんでいては、光り輝く世の中にならないから。	**・２つの発言のズレに着目させて、山田少年の心情に迫っていく。**
	○　みなさんは、山田少年のどのようなところに一番共感しましたか。 ・大人も子どももいっせいに立ち上がろうと呼びかけているところ。 ・差別に負けずに自分で立ち向かっているところ。 ・差別は、大人だけで解決するのではないと思っているところ。	・差別の現状に対する山田少年の様々な思いと呼応させ、一つの考えに集約するのではなく、それぞれの考えの良さを出し合う。
4　自分たちの日常を振り返る。	**○　今の世の中は、山田少年が本当に望んでいる光り輝く世の中になっているでしょうか。** ・身の回りには、いじめや障がい者に対する差別などいろいろな差別が残っている。 ・すべての人が、光り輝く世の中とは、一人ひとりが大切にされる社会だと思う。 ・子どもだからと言って、差別は関係ないと言ってはいけない。 ・自分たちの身の回りの差別をなくしていけば、光り輝く世の中になる。	**・現在でも、いじめや差別はなくなっておらず、「山田孝野次郎少年の訴え」は、決して過去の事でなく、今でも意識する必要があることを実感させたい。**

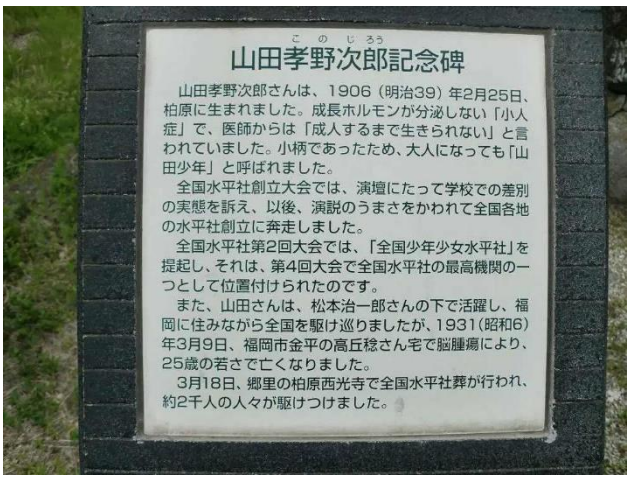
トピック：松本治一郎の懐刀といわれた山田孝野次郎

山田少年というと水平社創立大会の際に、参加者を前に演説した年端もいかない少年というイメージがある。山田少年は、水平社創立大会の時には16歳であったが、体が小さかったことから14歳としていた。彼が小さかったのは「小人症」という病気のためであった。しかしながら、大阪の西浜水平社創立大会で、水平社に批判的な人々がピストルを持って入場してくるという噂が広がり参加者が動揺し始めた時、山田少年は壇上に駆け上がり、「この私をうって下さい。そんなことをこわがるようでは駄目です。こわい人は、すぐ帰って下さい。」と怒鳴りつける図太さがあった。このような山田少年であったからこそ、松本治一郎の懐刀として全国を飛びまわり、福岡では反軍闘争に取り組んだが、わずか25歳という若さでその短い生涯を終えた。

その死を惜しんで九州水平社の葬儀の一週間後に行われた水平社葬では、約2,000人の同志が駆け付けた。葬儀は、彼の地元の西光寺で行われた。生前の業績を称えるために、掖上尋常小学校（現・掖上小学校）の西隣に記念碑が建てられた。碑の表には「山田孝野次郎君之碑」と刻まれ、裏には「昭和６年３月９日没同11年９月全国水平社建立」と刻まれている。



全国水平社青年同盟の演説会で
差別とのたたかいを訴える山田孝野次郎



孝野次郎が通っていた掖上尋常小学校（現・掖上小学校）西隣に建てられている記念碑